

〈論 文〉

## ドイツにおけるユグノーの経済活動

金 哲 雄

### 目 次

- はじめに
- 一 工業
  - 1 繊維工業
  - 2 その他の工業
- 二 商業・金融業
- 三 農業
- むすび

### はじめに

ルイ 14 世がナント勅令を廃止した（1685 年）のに伴い、約 3 万のユグノーがドイツに亡命し、そのうち 3 分の 2 がブランデンブルクに定着したであろうとされる<sup>(1)</sup>。約 600 人が古ベルリン郊外に「新たな都市」を設立し、そこに居住した。彼らは首都総人口の約 5 分の 1 あるいは 6 分の 1 を構成していた。また、おそらく 2000 人から 3000 人がカッセルに定着したであろう<sup>(2)</sup>（図 1、2 参照）。

しかし、ボイレケの研究(W.Beuleke, *Studien zum Refuge in Deutschland und zur*

---

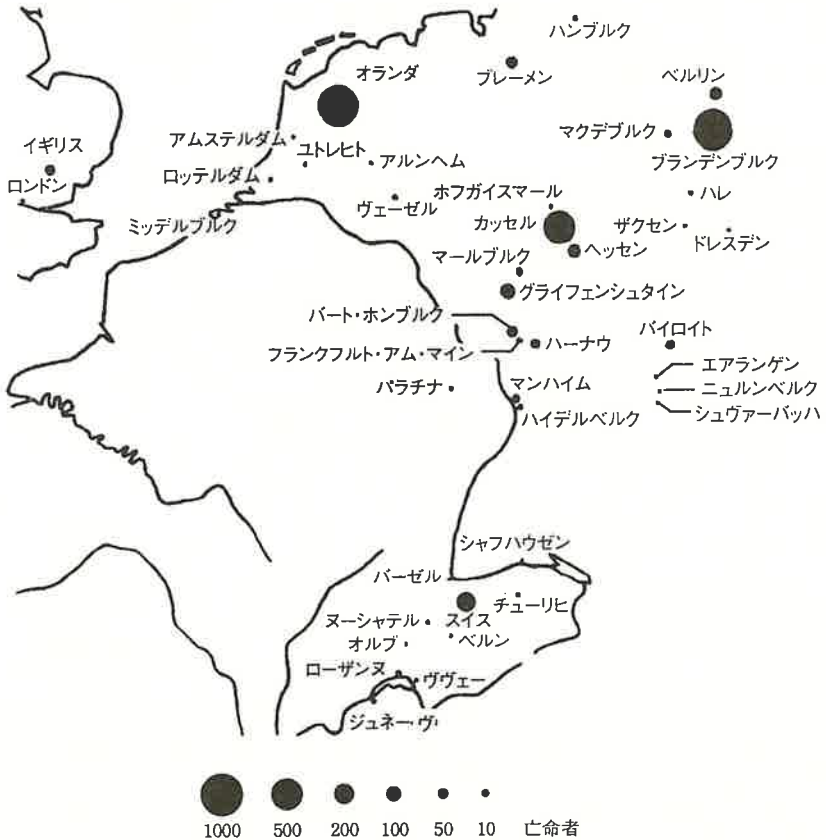
(1) Warren C. Scoville, *The Persecution of Huguenots and French Economic Development, 1680-1720*, (Berkeley et Los Angeles, 1960), p. 352

(2) Ibid., p. 125

ドイツにおけるユグノーの経済活動

図1 フランクフルト・アム・マイン居住のユグノーによって知らされた亡命地

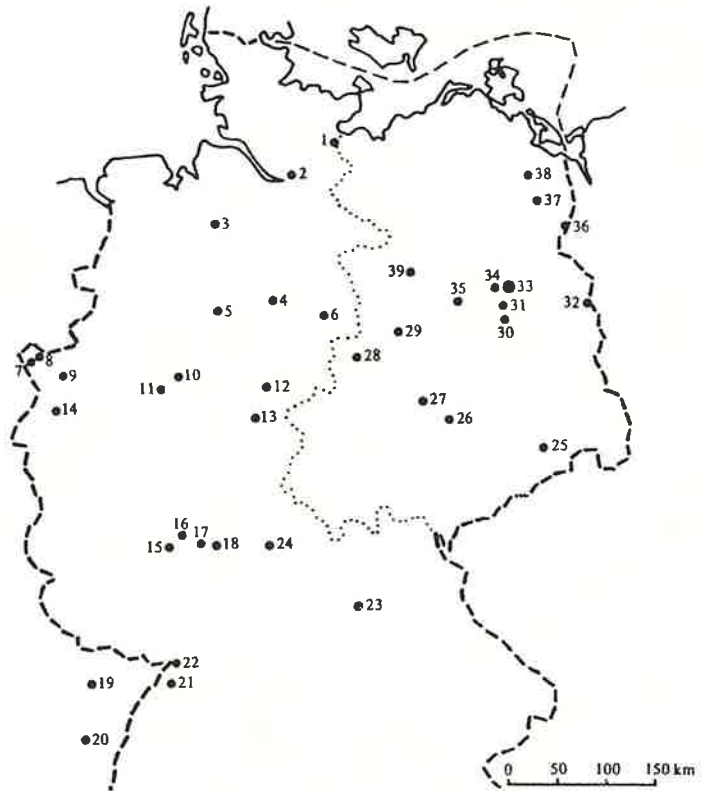
[社会科学高等研究院 グラフィック研究所 ジャック・ベルトラン (Jacques Bertrand) の地図作成法、出展：国立科学研究センター ミッシェル・マグドレーヌ (Michelle Magdelaine)]



(注) フランクフルト・アム・マインはドイツにおける亡命の転車台であった。ライン川を渡ってスイスあるいはオランダから来たユグノーは、そこからドイツの諸領邦へ散住していった。16世紀に創設されたフランスのプロテスタント教会は、亡命者（フランクフルト・アム・マイン市の古文書館に保存されている数多くの登録簿において確認できる）にかなりの援助を提供した。

(出所) *Les Huguenots*, (Archives nationales, 1985), p. 172.

図2 ドイツおよびアルザスにおけるユグノーの主要な亡命都市



1. リューベク 2. ハンブルク 3. ブレーメン 4. ハノーヴァー 5. ミンデン 6. ブラウンシュヴァイク 7. クレーヴェ 8. エメリッヒ 9. ヴェーゼル 10. リップシュタット
11. ゾースト 12. カールスハーフェン 13. カッセル 14. ジュイスブルク 15. ナッサウ
16. アンスバッハ 17. フランクフルト・アム・マイン 18. ハーナウ 19. ファルスピール
20. サント・マリー・オー・ミーヌ 21. ビシュヴィレ 22. カールスルーエ
23. エアランゲン 24. ケッニヒスベルク 25. ドレスデン 26. ライプチヒ 27. ハレ
28. ハルバシュタット 29. マクデブルク 30. ベルクホルツ・レーブリュッケ 31. ポツダム
32. フランクフルト・アン・デア・オーデル 33. ベルリン 34. シュパンダウ
35. ブランデンブルク 36. シュヴェート 37. プレンツラウ 38. シュトラースブルク
39. シュテンダール

(出所) Janine Garisson, *L'Edit de Nantes et sa révocation, histoire d'une intolérance*, (Editions du Seuil, 1985), p. 287.

*Ursprungsheimat seiner Mitglieder*, Obersicke-Braunschweig, 1977) によって、ドイツへのユグノーの亡命数に関して最も信頼できる、最も慎重な数字が得られるとされる。それによれば、4万4000人のユグノー〔正確には亡命者だけの数ではない。そのうちブランデンブルク（後のプロイセン）2万、ヘッセン＝カッセル 3800、マイン＝ラインの地域 3400、パラチナとドゥ＝ポン 3400、フランコニア 3400、ヴェルデンベルク 3000、ハンザ同盟の諸都市 1500、低サクソニア（ザクセン）1500〕がドイツ諸領邦に定住したのであろう、と推定されている。ドイツが好んで亡命者を受け入れた要因として、三十年戦争（1618-48年）による著しい人口減少（いくつかの地域では40-60%の減少）、当時ドイツでとても流行していた重商主義理論、ブランデンブルク選帝侯フリードリヒ・ヴィルヘルム（1620-88年、位1640-88年、彼自身カルヴァン主義者）の個人的な影響力が挙げられる。他方、ユグノーに対して敵対的に働いた主要な要因は、ルター派がドイツ・プロテスタントの圧倒的多数派であったという事実である。すなわち、ユグノーに対する敵意には、二つの理由がある。一つはユグノーが敬虔的であり、もう一つは国民的であるからである。ユグノーは、迫害されたにもかかわらず、フランスに留まり、その限りにおいて常に懐疑的であった<sup>(3)</sup>。

このような困難な状況も伴ったが、ルードルフ・フォン・タデン (Rudolf von Thadden) は *Les Huguenots* において、プロテスタント君主の積極的な保護によって、亡命者の定住は急速に進んでいったと指摘し、ドイツにおけるユグノーの役割を以下のように言及している<sup>(4)</sup>。

君主は、ルイ14世の絶対王政から生じた「信仰の亡命者たち」(réfugiés pour la foi) を受け入れることによって、次の三つの利益を得た。すなわち、亡命者たちは人口を増加させ、経済に新たな影響力を及ぼし、絶対主義国家を最終的に強力なものにしたのである。領邦が発展途上であればあるほど、統一の必要性が感じられれば感じられるほど、亡命者の近代化における役割、「公的有用性」(l'utilité publique) が評価された。ブランデンブルク＝プロイセンは、亡命

(3) Myriam Yardeni, *Le refuge protestant*, (Presses Universitaires France, 1985), pp. 77-78.

(4) *Les Huguenots*, (Archives nationales, 1985), p. 170.

者を大いに利用した。人口が増加し、統一意識が発展し、その意識がホーエンツォレルン家国家（l'État Hohenzollern）と一体化されていった。他の小領邦においてもまた、亡命者は貢献した。ヘッセン=カッセルは急速に文化の中心地になり、フランコニアのプロテスタント集団におけるエアランゲンは大いに名声を博した。そこではプロイセンのようにユグノーと一体となった国家を建設できなかったけれども、「信仰の亡命者」を受け入れることによって大いに名声を博したのであった。

亡命者に彼らの伝統、風習を保存しながら定住の可能性を確信させるためには、単に彼らを受け入れるだけではなく特権や譲歩を与える必要があった。ナント勅令廃止まもない 21 日後に、フリードリッヒ・ヴィルヘルム選帝侯は、ドイツ語とフランス語の 2 か国語で書かれた有名な「ホツダム勅令」を布告し、ユグノーに対して新しい故郷と 14 項の優遇策を提供した<sup>(5)</sup>。亡命者が定住する際に一般的に採用する、最も頻繁な形態はコロニー（Colonies）の創設であった。選帝侯は、亡命者に彼らの教育、教会、自立した司法制度の備わり、選出された指導者をもつ固有の文化共同体を形成する権利を保証した。このような優遇策はフランス革命とナポレオンの時代に取り除かれるが、それでもやはり、ユグノーの伝統は 19 世紀、そして今日まで失われなかったのである。ピスマルクによるドイツ帝国の創立後、ある大きな重要性がユグノーの根源に再び求められた。ナント勅令廃止に対する最終的な勝利の時に、ユグノーの祖先は決定的な要素として考えられた<sup>(6)</sup>。

(5) Scoville, op. cit., p. 349. すなわち全権委員がオランダ經由およびフランスの南部と東部からの亡命者を世話する (1)、2)、定住市町村の自由な選択、良き受け入れと完全な自由 (3)、所持財産は免租 (4)、住居と建築用材を提供、家屋は6年間免租 (5)、所持財産の世襲 (6)、市民権とツンフト加入資格の保証 (7)、企業家には債権を貨幣で保証 (8)、農民には土地を提供 (9)、独自の裁判 (10)、各都市に独自の牧師と礼拝場所を配慮 (11)、フランス貴族とブランデンブルク貴族との同格の扱い、宮廷、役職においても同様 (12)、これまでの信仰の亡命者にも同じ権利を認める (13)、ユグノー問題のための全権を各市町村に置く (14) (諸田実「信仰の亡命者」神奈川大学経済学会『商経論叢』1978年第14巻第1号、87頁)。

(6) Ibid., pp. 170-171.

ドイツにおけるユグノーの経済的役割については、ゾンバルトは「17世紀および18世紀におけるドイツの経済生活のなかで、フランス移住民が演じた役割は、よく知られている。彼らはいたるところで、とくに資本主義的工業をまったくはじめてつくりあげ、個々の巨大な商業分野（たとえば絹製品）をほとんどすべて手中に収めていた」<sup>(7)</sup>と述べている。本稿では、17世期末にフランスから来住したユグノーがドイツ経済に及ぼした影響を明らかにするとともに、あわせてその経済的役割の意義を考えてみたい。

## 一 工業

### 1 繊維工業

プロイセンにおける亡命ユグノーの職業統計（1700年）によると、3744人のうち、商人409人、タバコ栽培人213人、熟練工540人、帽子製造人35人、ボタン製造人14人、仕立て屋93人、レース製造業者、絹織物製造業者、靴下製造業者、毛織物製造業者、つづれ織製造者739人などであった<sup>(8)</sup>。ドイツが経済発展においてほとんどのヨーロッパ諸国に遅れをとっていたので、ユグノーが商工業の多くの分野において影響を及ぼしたのである。その一つが、フランスがとくに実力を発揮していた毛織物工業であった。

ラングドックやスダンから多数の毛織物の製造業者や労働者が、ブランデンブルクに移住した。選帝侯は、彼らにマニユファクチュア設立に適切な都市に移住させた。労働者には衣服、住居、一日につきグロッシュ小銀貨2、製造業者には財貨、必要なすべての道具が提供された。ラシヤ製造業者のすべては、縮絨機、圧縮機、染色工場、現金さえ受け取った<sup>(9)</sup>。選帝侯は、羊毛の輸出を

(7) Werner Sombart, *Der Bourgeois, Zur Geistesgeschichte des modernen Wirtschaftsmenschen*, (1923), S. 386. 金森誠也訳『ブルジョワ—近代経済人の精神史—』中央公論社、1990年、397頁。

(8) Scoville, op. cit., p. 352.

(9) Charles Weiss, *Histoire des réfugiés protestants de France depuis la révocation de l'Edit de Nantes jusqu'à nos jours*, (Paris, 1853), I, p. 156.

禁止し、紡毛糸の輸入に課税した。軍隊には自国産の衣服を身につけるように命じ、製造業に対する規則や基準を公布した<sup>(10)</sup>。

三十年戦争によってまったく廃虚化したマクデブルクの都市は、ユグノーのコロニーの創設により、まもなく工業の豊かな中心地の一つになった。ニーム出身のボスク(Bosc)一家の3兄弟をはじめユグノーは、ラシャ、ルーアン(Rouen)・サージ、イスパニア錠、綿毛交織物(droguets)のマニユファクチュアを設立した。ニーム出身のアンドレ・ヴァランタン(André Valentin)とモンペリエ出身のピエール・クラパレド(Pierre Claparède)は、毛織物を製造していた。ブルゴーニュ出身のアントワヌ・ペル(Antoine Pellou)とダニエル・ペルネ(Daniel Pernet)は、羊毛やビーバーの帽子マニユファクチュアを設立した。靴下製造は、ピエール・ラブリー(Pierre Labry)の指揮の下で6人の亡命者によってもたらされた<sup>(11)</sup>。

プロイセンには1700年、約260人のユグノーの靴下労働者がいた。彼らは編物技術を普及させ、マクデブルクで多くの毛織物靴下を製造していた<sup>(12)</sup>。たとえヴェイマールのフランス・コロニーがほんのわずかの期間しか存続しなかったとしても、靴下製造業に深い痕跡を残したのである。マクデブルク定住のラングドック出身のある靴下製造業者は、1687年にチューリッヒにいる兄弟に直ちに自分と合流すべきであると手紙で書いている。しかもその手紙で彼は「羊毛は良質・安価であり、…紡ぎ方は熟練で、低賃金であり、景色は美しく、食物は安い」としたためている<sup>(13)</sup>。

ハレのコロニーは、モケット(moquette)やハンガリー・レースを製造し、そしてその生産物をライプチヒの市場に容易に流通させることによって繁栄した。ブランデンブルクのコロニーは、ノルマンディー出身のラシャ製造業者が

(10) Scoville, op. cit., pp. 352-353.

(11) Weiss, op. cit., I, pp. 156-157.

(12) C. Couderc, "L'Abbé Raynal et son projet d'histoire de la l'Edit de Nantes, documents sur le Refuge", *Bulletin de la société de l'histoire du protestantisme français*, (XXXVIII, 1889), p. 602; Scoville, op. cit., p. 353.

(13) Scoville, op. cit., pp. 353-354.

到着した後に栄えるようになった。ラシャ製造で名声を博したのは、とくにルーアン出身のダニエル・ル・コルニュ (Daniel Le Cornu) に負っている。彼は、プロイセンでその当時知られていなかった、緋色に染める技術を普及させた熟練の染色業者であった。フランクフルト・アン・デア・オーデルは、ルーアン出身の製造業者を受け入れた。彼らは、ゴブランにおいて染色業者であった、彼らの同郷人リュック・コサル (Luc Cossart) の援助で立派な毛織物工場を設立した<sup>(14)</sup>。

ユグノーはベルリンで毛織物の集中マニュファクチュアを僅かしか設立しなかったが、その首都は豊かな都市に変わり始めた。彼らは、とくにある大きなサージのマニュファクチュアを設立した。これらの毛織物工業の発展によって、ドイツや北ヨーロッパすべてにおいてその生産物に対する多くの販路が開かれた。毛織物の輸出は急速に増加したので、フレデリック 1 世の治世下のベルリンでは、85 の毛織物マニュファクチュアにおいて数千人の労働者が雇用されていた。ユグノーの製造業者の創意に富んだ企業家精神とともに、政府の支持によって毛織物の製造は増加した。政府は、毛織物がいまだ製造されていないドイツの領邦へ輸出するのを積極的に奨励した。まもなくユグノーは、ライプチヒ、ブラウンシュヴァイク、フランクフルト・アム・マインなどの市場で豊かな新販路を見出した<sup>(15)</sup>。

また、選帝侯は 1687 年 3 月 30 日、国外からの毛織物の輸入を禁止する行政命令を出した。コルベールの例に従って、彼は織物の品質、サイズ、重さに関する細かい規制を公布した。すべての都市における検査官は、ベルリンの「商務省」(département du commsrce) と連絡をとる責任を負っていた。ピエール・ド・メズリ (Pierre de Mézeri) は、「検査長官」(inspecteur général) に任命された。彼はすべてのマニュファクチュアを訪れ、行政命令が遂行されているかどうか注意を傾け、各検査官、有名な商人、コロニーの裁判官と執政官に助言を与える、という使命を担っていた。彼の特別な任務は、労働の質を調査し、

---

(14) Weiss, op. cit., I, p. 157.

(15) Ibid., I, pp. 157-158.



労働者や経営者の不平を受け入れることであった<sup>(16)</sup>。

政府の保護によって、彼らはフランスやイギリスの大製造業者との競争を維持し、その誠実さと実践的な信仰心によって、信頼と信用を得、資金が豊富でなかったにもかかわらず、成功を収めることができたのであった。彼らはポーランド、ロシア、デンマーク、スウェーデンとの関係を築き、コペンハーゲン、ハンブルク、ダンチッヒで設立した支店はブランデンブルクすべてにとって富の無尽蔵の源泉となった<sup>(17)</sup>。エアランゲンにおいても、3人の毛織物製造業者が1300人の労働者を、7人が少なくとも1000人の労働者を雇用していたという<sup>(18)</sup>。

毛織物マニュファクチュアに次いで、帽子マニュファクチュアは、ユグノーがブランデンブルクに移植した最良の工業の一つであった。この国では当時、数少ない粗野な帽子しか製造されていなかった。エレガンスを誇っていた人々は、大金を払ってフランスの帽子を買っていた。したがって、選帝侯は積極的にユグノーの帽子製造業者を受け入れたのであった。主な帽子マニュファクチュアは、マクデブルクではドフィネにおけるロマン (Romans) 出身のアントワヌ・プル (Antoine Pelou) によって、ベルリンではルーアン出身のダヴィド・マレ (David Mallet)、とくにルヴェル (Revel) 出身のギヨーム・ドゥイユアック (Guillaume Douilhac) などによって設立された<sup>(19)</sup>。マレの報告書 (*Mémoires de David Mallet, de Rouen pour obtenir la création d'une fabrique de chapeaux à Berlin. 13 octobre 1687*) によれば、マレは2500ターレルの援助を得、その償還されるべき2000ターレルで彼の企業を創始した<sup>(20)</sup>。そして、これらのエレガントな生産物はポーランド、ロシアにさえ輸出された<sup>(21)</sup>。

(16) Ibid., I, pp. 158-159.

(17) Ibid., I, pp. 159-160.

(18) E. Sayous, "La Colonie réformé d'Erlangen en Bavière", *Bulletin de la société de l'histoire du protestantisme français*, (XXXVI, 1887), p. 7.

(19) Weiss, op. cit., I, p. 161.

(20) *Les Huguenots*, p. 177.

(21) Weiss, op. cit., I, p. 161.

ブランデンブルクのような寒い国では、桑の木を植え、蚕を育てることは困難であったが、ユグノーによって実現した。彼らは、絹織物、ビロード、金・銀のプロケード、リボン、打ち飾り紐などを製造した<sup>(22)</sup>。絹織物の生産量は、フリードリヒ2世（大王）（1712-86年、位1740-86年）治世下初期の100ポンド（1ポンド=500グラム）からその後期の11000ポンドへ増加した<sup>(23)</sup>。ユグノーのうちにはケーニヒスベルクで生糸撚糸場を設立し、リボン織布業を移植させたものもいた。フランス人は次のように不満をもらしていた。ユグノーがハンプルクや他のドイツの諸地域でリンネル製造できわめて大きな成功を収め、フランスからイギリス、スペイン、インドの市場を奪っていると。彼らは、サン・カンタン、ラヴァル、モルレの有名な生産物を模倣し、フランスにそれを販売しようとさえした<sup>(24)</sup>。

フランスが優れていた刺繍業も、パリからの4人の亡命者ジャック、ピエール、ジャン、アントワーヌ・パヴレ（Jacques, Pierre, Jean, Antoine Pavret）によってもたらされた。選帝侯は、彼らに騎兵の鞍やカバー、将校の制服に刺繍する任務を与えた。ブランデンブルクにおける最初のキャリコ捺染業は、パリの大工場からの労働者によって設立された。パリの工場では麻織物と綿織物がプリントされていた。紗製造業はピカルディー、シャンパーニュ、とくにサン・カンタン、トロワ、ルーアン出身の労働者によってもたらされた。最初はこの軽薄な装飾はドイツの風習に合わなかったが、しかしそのファッションは選帝侯の保護の下で浸透していった。選帝侯の後継者はこの新産業を奨励し、それによって正貨の流出は減少した<sup>(25)</sup>。

つづれ織の製造も、ユグノーによってもたらされた。ブランデンブルクへの亡命者に関する覚書によると、オービュソン出身のピエール・メルシエ（Pierre Mercier）は、1686年に選帝侯からつづれ織に関する特許状を得た。その特許

(22) *ibid.*, I, p. 162.

(23) Ingrid und Klaus Brandenburg, *Hugenotten, Geschichte eines Martyriums*, (Edition Leipzig, 1990), S. 160.

(24) Scoville, *op. cit.*, p. 353.

(25) Weiss, *op. cit.*, I, p. 166.

状は、あらゆる種類のつづれ織製造を許可し、9人の労働者を雇用するため君主の個人資産から2400エキュを与えるというものであった。つづれ織製造は、フリードリヒ・ヴィルヘルム1世治世下でとりわけ繁栄するようになった。メルシエの義兄弟であるオービュソン出身のジャン・バラボ (Jean Barrabaud) は、メルシエの死後につづれ織の工場長に任命された。この工場は、依然としてその後継者の下で繁栄し続けたのであった<sup>(26)</sup>。

*Coffre de la corporation des fabricants de bas d'Erlangen*, (1709)によれば、その金庫にはツunftの古文書が保存されている。辺境伯クリスチアン・エアネスト (Christian Ernest) はエアランゲンの新しい都市にフランスの手工業者を招き、オービュソン出身のジャン・ド・シャゾー (Jean de Chazeaux) の指揮の下でつづれ織のマニファクチュアを創業さえした。エアランゲン大学は今でもなお、そのつづれ織の一つを所有している<sup>(27)</sup>。

他のユグノーもベルリン、ポツダムの宮殿に数十年間つづれ織を供給し続け、ロシア、スウェーデン、デンマークに普及させた。つづれ織の製造は、ドイツにとっては不完全な工業であったので、君主がそれを支持する限りのみ繁栄した<sup>(28)</sup>。そして、それは当時最も輝かしい出来事とされた。ブランデンブルク、フランクフルト・アン・デア・オーデル、マクデブルクにおいても同様に、ユグノーによってつづれ織が製造された。つづれ織は、裕福な家庭が強く望んだ、当時の贅沢で最もエレガントな商品として、売れ行きが保証されていたのであった<sup>(29)</sup>。

## 2 その他の工業

ブランデンブルクにおける革なめし業は、ユグノーによって改良された。彼らはベルリン、マクデブルク、ポツダムなどで革なめし場を設立し、まもなく

(26) Fernand de Schickler, "Le Protestantisme dans la Marche et l'Eglise d'Aubusson", *Bulletin de la société de l'histoire du protestantisme français*, (XXX, 1881), pp. 299-300.

(27) *Les Huguenots*, p. 181.

(28) Scoville, *op. cit.*, p. 354.

(29) Weiss, *op. cit.*, I, p. 163.

それらの地域の需要に対して充分に対応できるようになった。その結果、シュレジエン（ポーランド南西部の地方）や北部の諸国から皮革はまったく輸入されなくなった。とくに皮革の手袋はラシャや毛皮の手袋に代わってドイツ全体に普及し、北部の諸国の人々でさえ、フランスが独占していたこの贅沢品をベルリンへ購入しに来たのであった。ベルリン居住の多数の単純労働者は、この手袋製造に従事することによってかなりの財産を築いた。ハレ、ハルバシュタット、マクデブルクにおいても手袋マニュファクチュアが設立され、ライプチヒやブラウンシュヴァイクの市場から利益を得ていた<sup>(30)</sup>。

エルマン (Erman) とレクラム (Reclam) は、*Mémoires pour servir à l'histoire de réfugiés dans les états du Roi*, (Berlin, 1782-1799) において次のように言明している。ナント勅令廃止時にはベルリンに一人の革なめし工しかいなく、革なめし業は不完全なものであった。ユグノーは革なめし場を設立し、革製品の生産を大いに増加させた。その結果、フリードリヒ・ヴィルヘルム 1 世 (1688-1740 年、位 1713-40 年) は木底の靴を履くのを禁止し、素足の人々の数もまた低下した。手袋工場はハレ、ハルバシュタット、マクデブルクで創業し、1702 年にはベルリン居住の手袋製造業者は「フランス亡命者手袋製造人組合」(Gild of French Refugee Glovers) に関する特許状を受け取ったと<sup>(31)</sup>。

冶金業と金属加工業においても、ユグノーの影響は顕著であった。ギエンヌ出身のエティエンヌ・コルディエ (Étienne Cordier) は選帝侯から鍛冶屋や鑄造所の監督官に任命された。みようばん石の鉱山は、ベアルネ・イサク・ラブ (Béarnais Isaac Labes) によって始めて採掘された。金属加工業の熟練労働者、武器鍛冶師、磨き工、錠前師、刃物製造人の多くのユグノーがブランデンブルクへ亡命して来た。スダンからの亡命者ピエール・フロメリ (Pierre Fromery) は、1687 年に宮廷武器鍛冶師に任命された。武器製造所は、ポツダム、シュパンダウにおいて設立された。青銅、銅、鉛の鑄造工、とくに鐘、活字の鑄造工の多くが選帝侯から招かれた<sup>(32)</sup>。

(30) Ibid, I, pp. 161-162.

(31) Scoville, op. cit., p. 354.

(32) Weiss, op. cit., I, pp. 163-164.

ドイツの錫製陶器は、フランスで当時流行していた最も洗練されたエレガントなものとはほど遠いものであった。ユグノーがその技術を改良することによって、それは輸出商品までになった。また、ユグノーは、ビール醸造業者、生活水製造業者、染色業者にとって必需品である銅製品の生産を盛んにさせた。この工業は改善され、その生産物は国外へさえ、とくにオランダ、ポーランドへ輸出されるようになった<sup>(33)</sup>。

フランスはナント勅令廃止以前の長い間、ドイツに金銀細工品と宝石細工品を提供してきた。しかし、ナント勅令廃止以降ベルリンは、ユグノーの金銀細工人と宝石細工人を受け入れるようになり、この結果、これらの工業は18世紀全般にわたって発展し続けた。ユグノーによってベルリンに移植された彫版術により、とくに宝石細工は当然ながら名声を博したのであった。ベルリンの宝石細工術が進歩するにつれて、ラングドック出身の労働者によって伝えられた宝石細工人の技術は進歩した。ブランデンブルクにおいて時計製作の技術はあまり進んでいなかったもので、時計工は錠前師のツンフトに編入されていた。フランスからの時計工が到着して始めて、選帝侯の領邦やその近隣地域では時計の使用は普及したのである。そして、その時計工のほとんどが、グルノーブル、ジュネーブ、ヌーシャテル、とくにラングドックの出身者であった<sup>(34)</sup>。

オランダの優秀な製紙工場とその紙の多大な輸出を見てきたフリードリヒ・ヴィルヘルムは、グルノーブル出身の亡命者フランソワ・フレールトン(François Fleureton)を熱心に受け入れた。フレールトンは、ブランデンブルクにおいて最初の製紙業を移植した。選帝侯は彼に工場建設資金として1200エキユを与え、その製造に必要なすべての材料に対して輸入免税を保証した。そして、彼はその材料を集めることのできる独占的な特権を持っていたのである<sup>(35)</sup>。トランプ製造の特権も、18世紀を通じてあるユグノー家族の手中にあり続けた<sup>(36)</sup>。

ブランデンブルクにおけるガラス製造業はユグノーによってもたされたもの

(33) Ibid., I, pp. 164-165.

(34) Ibid., I, pp. 165-166.

(35) Ibid., I, p. 162.

(36) Scoville, op. cit., p. 355.

ではなかったが、しかし彼らはその改良に貢献した。そこでは当時、並の板ガラスとガラスびんしか生産されていなかった。しかし、1690年の少し前にコペンハーゲンで板ガラス製造場を最初に建設したことのあるフランス人がノイシュタットにおいて板ガラス（鏡ガラス）を製造し始め、その後彼の息子はフランスの大きな鏡ガラスの製造方法を移植した。その製造場は成功を収め、少なくとも19世紀まで操業し続けた。ノイシュタットの鏡ガラスは、ヴェネチアやフランスのものに匹敵し、ドイツにおいてかなりの市場を獲得した<sup>(37)</sup>。この企業によってルイ14世は、アルザスに「王立鏡ガラス会社」(Royal Plate Glass Comany)の支店を創業せざるを得なかった。彼は、その競争の結果、ノイシュタットの工場が閉鎖してしまうことを望んだのであった<sup>(38)</sup>。

亜麻仁油、菜種油の製造、アミアン、アブヴィルのマニュファクチュアで長い間使用されていた黒石鱈の製造、粗野なランプに代わるろうそくの使用は、ユグノーの来住に負っている<sup>(39)</sup>。ルイ14世の輝かしい治世下のフランスにおいてはすべてが、最もエレガントで最も洗練された形態をとった。ユグノーによって、ドイツにおける最も単純で最も粗悪な職業のほとんどは、労働における細部の改良と仕上げによって熟練へと高められた。フランスの衣服、レース、造花、かつらはファッションになり、ユグノーは今までフランスが得てきたかなりの額を自らの利益に変えた。フランス料理によって、粗雑な風味からより洗練されたものに代わっていった。ベルリンで以前に知られていた唯一のパンであったライ麦のパンは、フランスパンと呼ばれている小麦のパンにとって代わった。その都市の焼肉屋や菓子屋はフランスのものであった。パリ風の最初のホテルはメッスからの亡命者によって建設され、ブラスリーはプファルツからの亡命者によって改良された。生活水の製造も、ラ・ロシエルとオニス出身のユグノーによって増加し、改善されたのであった<sup>(40)</sup>（以上の工業部門におけるユグノーの経済活動については図3参照）。

(37) Weiss, *op. cit.*, I, p. 163; Scoville, *op. cit.*, p. 354.

(38) Scoville, *op. cit.*, pp. 354-355.

(39) Weiss, *op. cit.*, I, p. 162.

(40) *Ibid.*, I, pp. 166-167.

図3 ドイツにおけるユグノーの主要な工業都市



## 二 商業・金融業

ユグノー製造業者のなかには商人をも兼ねていたものがいたが、しかし多くは商業のみに専念していた。最初のうちは、彼らは小売商を営み、誠実な生計を求めている。この単純な慣習と厳格な節約が、大財産を築く土台となった。彼らは富を増大させるにつれて、交易関係を広げていった。まもなく彼らは、市場を国内に限定するのではなく国外に獲得していった。ドイツのほとんどの諸

都市に定住したユグノーは、この始まりかけた交易関係を促進した。ブランデンブルクの中心地居住のユグノー商人たちは、北部の諸国において交易を行っていたすべての人々の仲買人となった。ベルリン、マクデブルク、フランクフルト・アン・デア・オーデルは商業都市になった。エルベ川とオーデル川は船で溢れ、すべての本街道は国産商品と国外商品を運ぶ車でまみれたのであった<sup>(41)</sup>。

18世紀において最も繁栄した商業の分野は、毛織物、絹織物、ビロード、飾り紐の分野であった。ベルリンのユグノー・コロニーは、主としてポーランドやロシアとの貿易によって豊かになった。金物の商業における大いなる発展は、ユグノーに負っていた。フランスの金物は、当時パーミンガムのものに次いで評価されていたものだった。食料品の新たな商業分野の拡張もユグノーに負っており、そこにはフランスのワインも含まれていた。ファッション品の商業は、ベルリンがドイツのパリと呼ばれるほどにまでに達した。書籍販売業は大いに発展した。ルーアン出身のロベール・ロジェ (Robert Roger) は、1687年にブランデンブルクの首都においてフランス書籍の最初の印刷所を設立していた。それは、とくにフリードリヒ2世によって熱烈に奨励されたのであった<sup>(42)</sup>。

国民産業がユグノーの強力な影響の下で生氣を取り戻すのに応じて、商業は新たな可能性を見出した。数年後にマクデブルク、ケッニヒスベルク、ハレ、フランクフルト・アン・デア・オーデルなどの都市には、ベルリンの商社と競合する商社が出現した。マレヌ出身のポール・ドミシー (Paul Demissy) の大会社は、最初の羊毛と麻の交織物 (siamoises)、絹と綿の交織物 (cotonnades) を製造させた。そして、この会社は、ブランデンブルク全体にとって豊かな交易のきっかけとなり、フランス・コロニーの繁栄に大いに貢献したのであった<sup>(43)</sup>。

商品の一時的な過剰に対処するため、選帝侯は、「ロンバール」 (lombard) と呼ばれていた割引銀行の成立を許可し、それを援助で支えた。「ロンバール」銀行は、商工業者に前貸することによって、困難時に商工業の維持に援助を与

---

(41) Ibid., I, pp. 167-168.

(42) Ibid., I, pp. 168-169.

(43) Ibid., I, p.169.



え、このようにして労働者の給与を保証した。1550 年以来オランダで存在していた bank van leeningen の名の類似の銀行は、商工業において影響を及ぼし、利益を与えていた。アムステルダムの銀行に倣って設立されたベルリンの銀行は、衣類を担保にし、政府による一定の利子と引換に貸付を行っていた。この銀行の特権は、パリからの亡命者ニコラ・ゴゲ (Nicolas Gauguet) に授与されていた。そして、その銀行そのものは、フランス司法とコロニー税務代理人の視察の下に置かれていた<sup>(44)</sup>。

確かに最も富裕なユグノーがイギリスあるいはオランダへ移住したが、しかし、多少なりの財産を持参してドイツに亡命したものもいた。1686 年から 1691 年までにベルリン居住のユグノーは、選帝侯に 6 ないし 8 %の利子で約 9 万ターレルも貸し付けていた。あるドイツの歴史家によると、1751 年にメッスからの亡命者だけでもブランデンブルクに 200 万エキュを持ち込んだとされている。そして、フランス人は 1689 年と 1692 年、選帝侯によって設立された貸付銀行の経営において高い地位を占めていた<sup>(45)</sup>。

### 三 農業

ユグノーの到来以前には、ブランデンブルクのすべての地域は、広大な未耕作地と、未開墾地のままであった。他の地域よりも全般的に土壤の良いマルシェ・ウクライナ (Marche Ukraine) 地域は、最も多くのフランス耕作者を引き寄せた。ベルクホルツのコロニーは、その大いなる繁栄をユグノーに負っている。プレントラウ、マルシェ・ウクライナ地域のシュトラースブルク、シュテングダールなどの地域は、フランスからの栽培者や園芸家によって人口の増加を伴った。彼らの末裔たちは、亡命の時代に割り当てられた土地を 19 世紀末当時でも依然として所有していた<sup>(46)</sup>。

(44) Ibid., I, p.159.

(45) Scoville, op. cit., pp.355-356.

(46) Weiss, op. cit., I, p.171.

このようにドイツは、フランスからの農民に便宜を与えたのであった。彼らはあまりにも貧しかったので、イギリスあるいはオランダへの通行料を支払うこともできず、農場を取得することもできなかったからである。しかし彼らは、どうにかしてフランスの南部や北西地域からライン川流域を渡ることができた。選帝侯は、新たな農業コロニーを開始させるために、彼らに土地、建築資材、家畜、種子を与えた<sup>(47)</sup>。彼らはそれぞれ、農具購入のために約 50 エキュを受け取っていた<sup>(48)</sup>。

フランスの手工業者と同様にフランスの農民は、ドイツの隣人よりも進んでいた。彼らは新たな土地を耕作地に変え、集約的な造園術を駆使することによって農場を田園における宝石のようにきらめかせた。それだけではなく彼らは、新たな穀物を移植した。前述したように、彼らは桑の木を植え、蚕を育てた。彼らは、染色の様々な色合いにとくに適しているといわれている種々の青色染料を持ち込んだ。彼らはタバコを大規模に栽培し、そしてチョウセンアザミ、アスパラガス、カリフラワー、じゃがいも、良質の果樹を移植したのであった<sup>(49)</sup>。

タバコの栽培は、ユグノーがブランデンブルクを豊かにした栽培のうち最も重要なものであった。マルシュ・ウクライナ地域とマクデブルクの土壌は、この新しい栽培にとくに適していた。これらの地域でタバコ栽培は、フランス・コロニーによって移植され、改良された。ブランデンブルクで栽培されたタバコは、まもなくデンマーク、スウェーデン、ポーランド、シュレジエン、ボヘミアへ輸出された<sup>(50)</sup>。マクデブルク・コロニーの資料によれば、約 35 万ターレルのタバコが 1708 年までにシュレジエンとボヘミアへ販売されていた<sup>(51)</sup>。

ユグノーがブランデンブルクに成した特別な貢献は、造園術を改良し、創造することであった。ユグノーの到来までそこでは、最も日常的な野菜がほとんど生産されていなかった。選帝侯の食卓に出されたものは、ハンブルク、ライ

---

(47) Scoville, op. cit., p.355.

(48) Weiss, op. cit., I, p.172.

(49) Scoville, op. cit., p.355.

(50) Weiss, op. cit., I, p.173.

(51) Brandenburg, a. a. O., S.161.

プチヒからのものであった。亡命ユグノー、とくにメッス出身のユグノーのなかで、多くの園芸家は好んでベルリンに定住した。彼らは、今まで耕作されなかったベルリンの広大な郊外を庭園に変え、フランスから種子、より良い品種のぶどうの苗（彼らはそこのワインに満足しなかったからである）、果樹を移植した。接ぎ木によって彼らは、実生の若木を改良してすべて品質の良い果樹にした。温室を使用することによって彼らは、そこの気候では不可能であった植物や果物を移植した。オレンジやレモンの栽培に専念するものもいた。オレンジ用の温室を所有し、宮廷の庭園にオレンジの木を供給することができ、そしてそれらをザクセンや他の隣接地域に販売できる富裕なものもいた<sup>(52)</sup>。

ユグノーは、果樹園の栽培よりも菜園の栽培に注意を払った。ユグノーの到来以前には、プロシア人の食物は、焼き肉あるいは塩漬け肉、魚、乾燥野菜に限られていた。プロシア人は、グリーンピースやインゲンマメをほとんど用いることはなかった。「インゲンマメを食べる人」(mangeurs de haricots)という呼び方は、ドイツ人がフランス人に与えた「蛙を食べる人」という呼び方に相当するニックネームであった。ユグノーは、彼らにカリフラワー、アスパラガス、アーティチョーク、サラダ菜（とくにそのドイツ名はフランス語を起源にしている）を知らしめた。熟練の花屋は、彼らに単弁花を二倍にし、様々な色で飾り立てる秘訣を教えた。このような驚くべき出来事は、ベルリン市民によって決してもたらされなかったものであった。とくに園芸家リュゼ（Ruzé）一家の非凡さについては、神秘的に語られた<sup>(53)</sup>。

(52) Weiss, op. cit., I, p.174.

(53) Ibid., I, p.175.

むすび

以上述べたように、亡命ユグノーがドイツ経済に及ぼした影響は工業、とくに繊維工業（毛織物工業、帽子製造業など）、金属工業において最も顕著であった。工業に比べて商業・金融業、農業ではユグノーの影響は小さかったが、その経済的役割は明白である。

フリードリッヒ・ヴィルヘルム1世は、1709年12月14日にケルンで発布された勅令において他の亡命者に比べて、とくにフランスからの亡命者の経済的役割を承認していた。セギュール・デュペイロン（Séguur-Dupeyron）は、プロイセンにおける工業の観点からして、ユグノーの影響によって議論の余地のない成功が収められたことを認めた。しかもなお、彼によれば、織物関連工業以外のすべての工業は1685年になって始めて開始されたのである。ユグノーがドイツにおいて65種にも及ぶ商業を始めたとする歴史家もおれば、また、グスタフ・シュモラー（Gustav Schmoller）は、ドイツにおけるすべての知的で経済的な発展にユグノーが及ぼした最も永続的で有望な影響を承認していた<sup>(54)</sup>。

すべての経済史家が承知しているように、ドイツは19世紀まで近隣の西欧諸国との経済的・技術的ギャップを埋めることができなかった。しかし、スコヴィル（Scoville）は、ユグノーが商工業や農業の発展に大いに貢献し、したがって、おそらく封建的な農業経済から高度に工業化された経済への転化を促進する役割を果たしたとしている。そして、スコヴィルはこのユグノーの経済的役割について微妙な否定的見解も次のように示している。もしユグノーが新たな隣人と一体となり、そんなに排他的でなかったならば、18世紀におけるドイツ経済の成長は現実よりも強い印象を与えていただろうことは明らかであると<sup>(55)</sup>。

1978年のパイオニア的な比較研究において、ジェルシュ・ヴェンツル（S.

---

(54) Scoville, op. cit., p.356.

(55) Ibid., p.357.

Jersch-Wenzel) は二つの少数派、フランス人とユダヤ人のブランデンブルク、とくにベルリンの地域における工業化に及ぼした影響に関する研究を行った。ヴェンゼルによれば、ユダヤ人は非同化的な少数派であるがゆえに非順応主義的であるので、その貢献はより重要であるとされる。そのことによって当然、彼らはより革新的で大胆になり得るのである。それに反して、フランスのユグノーは、政権によって保護され、おもねられた少数派であるがゆえに、正当な重商主義政策の、自発性を規制する政策のいわば人質になるとされる。1769年、ベルリンにおける61人のユグノー製造業者は1111人の労働者を雇用していたのに対して、6人のユダヤ人製造業者は995人の労働者を雇用していた<sup>(56)</sup>。企業規模の大きさが近代化のしるしであるとするならば、これらの数字はとてもし大きな違いを表現している、とミリヤム・ヤルドニ (Myriam Yardeni) は主張する<sup>(57)</sup>。

以上見たように、ユグノーは、スコヴィルにとっては排他的で、ヴェンゼルにとっては同化的である(ユダヤ人と比べてであるが)とされ、両者はユグノーに対して異なった見解を示している。また、ヴェンゼルは、ユグノーと比較して、ユダヤ人が非順応主義的であるがゆえにその役割はより重要であるとする。しかし、ユグノーに対する見解に関しては、これらの見解よりもヴェーバーの見解<sup>(58)</sup>がより注目されるべきである。ヴェーバーは、「近代資本主義の精神」がプロテスタンティズムの合理的経済精神に起源をもつものとし、ユグノーを近代資本主義の担い手とする。それに対して、ユダヤ人は、数世紀の間に経済上非合理的な業務、なかでも租税および各種の国家金融において必要不可欠な存在となった。これは要するに「賤民資本主義」であり、断じて近代の西ヨーロッパで発生したような合理的資本主義ではない、とヴェーバーは主張する。

確かに、ユグノーを少数派として位置づけること自体は重要である。しかし、ユグノーが同化的なのか非同化的なのか、という少数派の性格について議論す

(56) S.Jersch-Wenzel, *Juden und «Franzosen» in der Wirtschaft des Raumes Berlin-Brandenburg*, (Berlin, 1978), S.261.

(57) Yardeni, op. cit., p.189.

(58) 拙稿「ウェルナー・ゾンバルトのユグノー論」大阪経済法科大学経済研究所『経済研究年報』第11号、1992年8月、46-7頁、参照。

ることよりも、ユグノーを近代資本主義の担い手とするヴェーバーの視点の方がより意義のあるものだといえる。近代資本主義の担い手としてのユグノーが亡命先の経済発展に大きな役割を果たすのであるが、しかし亡命先によってその役割は異なっている。ドイツに及ぼしたユグノーの影響は、セギュール・デュペイロンも指摘しているように<sup>(59)</sup>、イギリス、オランダにおけるその影響<sup>(60)</sup>に比べて大きかったように思われる。

しかし、ユグノーが亡命先に及ぼした影響の大小よりも、ヤルドゥニが「ユグノーが亡命先でほとんどすべての必要な切り札をもたらしたと結論づけることができる。しかし、その切り札はその効果に適合した構造がすでに存在している所のみにも効果的に貢献し得るのである」<sup>(61)</sup>と指摘しているように、当時の歴史的な事情と亡命先の経済的諸条件との関連からユグノーの役割を評価することがより重要なのである。その点からして、イギリスにおけるユグノーの経済的役割がより重要な意義を有しているといえる。当時のイギリスは、フランスやオランダを相手とする重商主義競争を闘い抜いてその優位的地位を確立し、産業革命を開始するための内部的諸条件を準備していた。ユグノーはこのイギリスの資本主義的發展に促進的な役割を果たし、イギリスを18、19世紀における指導的地位に押し上げるのに重要な役割を果たした。それに対して、たとえドイツにおけるユグノーの役割が大きかったとしても、ドイツの産業革命は19世紀になって始めて開始されたにすぎなかったのである。

---

(59) Scoville, *op.cit.*, p.356.

(60) 拙稿「イギリスにおけるユグノーの経済活動」大阪経済法科大学『経済学論集』第19巻3・4合併号、1996年3月、拙稿「オランダにおけるユグノーの経済活動」『大阪経済法科大学論集』第60号、1995年3月、参照。

(61) Yardeni, *op.cit.*, p.189.